

連載

シリーズ・活躍する女性診断士たち

—「元国連職員!？」ママさん診断士は今日もゆく②

野田さえ子

愛知県支部 国際ビジネス研究会 代表

前回は、シングル・ワーキング・マザーとして奮闘した国連時代の仕事模様と、ダメな母親ぶりをお伝えしてきました。

今回は、そんな私に人生の大きな転機が訪れたときのエピソードです。

1. ああ！運命の2001年9月11日

(1) 日本からの1本の電話

妊娠7ヵ月で国連職員としてニューヨークに赴任し、モンリオール議定書班に配属されてから2ヵ月。産休に入って2週間後、無事、男の子を出産しました。途上国での仕事为中心の夫も、出産前後の3ヵ月は仕事を入れず、“専業主夫”をするためニューヨークへやってきて、久々に家族水入らずの穏やかな生活を送っているときでした。

2001年9月11日午前8時過ぎ、1本の電話が鳴りました。

「世界貿易センタービルに飛行機が突っ込んで炎上しているようだ」

次の日、孫の顔を見ようと日本からニューヨークへと発つ予定の義父からでした。

「え？」と思い、自宅の窓を眺めると、異常なほどの黒い煙がもうもうと立ち上っているではありませんか。

わが家はマンハッタン島から川を一本はさんだ対岸のクイーンズにあります。あわてて、テレビをつけると、「2機目も突っ込んだ」ことが分かりました。長年、途上国での生活が長くテロやらゲリラやらに遭遇した経験のある夫とは違い、危機管理意識のまったくない私でしたが、

この状況にはさすがに、「事故ではない、テロだ！」と血の気が引く思いをしました。

もう一機、行方不明のままの飛行機がどこに落ちるのか、もう自分たちも危ないかもしれない、とテレビにずっとかじりついていました。

家の外からは、ひっきりなしにマンハッタン方面へとサイレンを鳴らして走る消防車や警察の車が続いていました。いまから思えば、その車両に乗り込んでいた人々のほとんどが、その後の倒壊を予想することなく救護に向かっていたのです。自らの死を予想もせず走るそのサイレンの音は、1日中途切れることはありませんでした。

夜になると、米軍の戦闘機がニューヨークの上空を何度も低空飛行しています。爆音がそのたびによぎります。

眠れない夜――。

「ここは、戦時下の国なんだ」

低い爆音が耳に残るたびに、心の中で繰り返していました。

(2) キャンドルの灯

あれから数週間がたちました。町の道路には、追悼のためのキャンドルが日々増えていきました。

近所の病院には、行方不明者を探すポスターが貼られ、スペースに入り切らないほどあふれていました。

日本人の顔写真も多く見かけました。身体的特徴や顔写真、何階で働いていたなどが簡潔に書かれているカラーポスター。行方不明の同僚を探す日本の銀行関係の駐在員が作成したポスターも、掲示されたまま、色褪せていきました。

そして、町のキャンドルの灯が増えていくにつれ、復興の兆しも現れ始めました。



行方不明者を悼む街角

(3) 仕事復帰は避難訓練から

同時多発テロ後2ヵ月が経ち、産休が明けて、早速仕事に復帰。世界貿易センターと同じような高層ビルで、富の象徴ともいえるクライスラービルへ出勤する毎日が始まりました。

子どもの預け先は、マンハッタン島ではなく、対岸のクィーンズにしました。2次災害を恐れたのです。

「もし、今日、私に何かあったら、セネガルにいる夫にコレクトコールをかけて、連絡してほしい。子どもは数日したら引きとれるので、それまでは面倒をみておいてほしい」

そのように託児所のスタッフに伝え、手はずを整えておきました。

復帰早々は、同時多発テロ後というご時世のため、仕事に集中できる環境にはありませんでした。

部内会議の後、自席に戻り早速仕事を開始しようとする、緊急アナウンスが入りました。

「当ビルの前の通りに、持ち主のわからない荷物が発見されました。爆弾処理班が到着次第作業を開始しますので、至急、避難してください」

窓から見下ろすと、路上に警官が集まり、ものしい雰囲気です。赤いテープを張っています。みんなはあわてて、階段から避難を始めました。

私たちのオフィスはクライスラービルの6階だったからよかったものの、50階などの高層階にいる人は、階段から下りてくるだけでも目の回る思いを何度もしたことでしょう。

こんなことが週に何度か、当たり前のように起こりました。

2. 3つの疑問

(1) 死んだら残るものって？

同時多発テロを経て、自分はこのままでいいのだろうか、と考えることが多くなりました。

高校生のころ、インドのダム建設に伴う住民の強制退去や環境問題が日本の政府開発援助によってもたらされたことが大きく報じられていました。そのころから、何か自分で変えることができないのか、と何も疑問を持つこともなく、この援助業界と呼ばれる社会で働く道を選びました。

こうして「生きるか、死ぬか」、あるいは「生かされたのか、そうでなかったのか」という問題に直面したことで、このままでいいのだろうか、と考える日が続きました。

そして、「自分が死んだら残るもの」、あるいは「自分が生きた証」は、残念ながら自分としては邁進してきたつもりはこの業界内での仕事ではなく、自分が産んだこの子1人だけか、と愕然としたものです。

とくに国連という組織で働くことは、とても有意義で、チャレンジングであり、毎日が学びの連続でしたが、自分にしかできない仕事ではないのではないか、あまりにもマクロの世界での小さな貢献にすぎないのではないかと、少しずつ疑問も感じ始めていました。

同じ小さな貢献でも、子どもを産み育てるのと同じように、もう少しミクロな世界で、独自性があり、新しい価値を創り出すような仕事をすべきではないのかと感じ始めました。

(2) 倒産理由がわからない

担当しているナイジェリアのオゾン層破壊物質削減プロジェクトを進めていくうちに、もう1つの疑問がわいてきました。

同プロジェクトの対象となっている途上国の中小企業の倒産数が多いということです。

このプロジェクトは、モンリオール議定書のための多国間ファンドから資金が下り、その資金をもとに代替ガスを使用する機械や技術指導を導入し、オゾン層を破壊する物質を削減するという手順で進めていました。つまり、このプログラムの対象となっている中小企業は、企業としての資金負担はないはずなのです。それ

なのになぜ倒産がおきるのか。

金融や経済の状況が不安定な途上国という特質のせいだけではない気がしてきました。

当時、このプログラムを実施する団体は、世界銀行 (WB) を始め、国連環境基金 (UNEP)、国連開発計画 (UNDP)、国連工業開発機関 (UNIDO) など複数ありました。資金のドナー国からなる執行委員会が毎年開かれ、各実施機関の仕事ぶりの評価や予算配分を決定しています。具体的には、各実施機関のプロジェクト実施スピードや目標達成度、効率性を精査し、その評価に基づき次年度の予算の分配を決めるという、競争性を取り入れた仕組みとなっていました。

UNDP と組んで実施していた私たちの機関の成績はというと、毎年予算が減らされていく「負け組」にいました。

「勝ち組」はどの機関かというと、WB でした。豊富な資金力があり、優秀な人材の集結している WB であれば、誰もその勝利を予想することが容易にできます。しかし、それ以外にも勝ち組となった理由があったと思います。

中小企業診断士となったいまは、ようやくその理由がわかるようになったのですが、当時はあまり深く理解していませんでした。

WB の成功の理由。それは企業の「キャッシュフロー経営」を考えているということでした。

当時、私たちの実施方式は、機械や技術者の調達は国連側で行っていましたが、それに付随する費用は、まず企業側が負担し、後にその領収書の添付をもって払い戻すというやり方でした。

企業にとって大きな悩みは、税関費用でした。たとえば、ナイジェリアのような国は、1つの機材に対する税関の手続き費用が2,000ドルを超えることも珍しくなく、この費用を最初に企業側が負担する必要がありました。

中堅企業ならいざしらず、金融機関の信頼性の低いナイジェリアにおいて、この費用を前もって建て替えなければならない零細企業のキャッシュフローが悪化するのには目に見えています。こうした事前支払方式によってキャッシュフローが悪化し、倒産に陥った企業もあったと思われます。

これに対し、世界銀行の実施方式は、機材や技術転換のコンディショナリティ (融資条件) を付し、最初あるいは段階的に融資を行う方式でした

ので、企業がキャッシュフローで困ることは国連方式より少なかったと予想されます。

当時の私は、こうした「お金の法則」についてあまりにも無知でした。途上国の開発問題や援助業界にいるのなら、お金についての基礎知識をもう少しつけていく必要があるのでは、という思いが強くなっていました。

(3) 「雇われない生き方は何を変えるか？」

最後の疑問は、自分の働き方に関してでした。これまでの自分の仕事のキャリアは、どこかの機関に所属し、勤めるということしかしてきませんでした。つまり「雇われる」という選択肢のみをとってきて、それ以外の選択肢を自分の頭の中に描くことがなかったのです。

そんな折、1冊の本と出会いました。「フリーエージェント社会の到来：雇われない生き方は何を変えるか」(ダニエル・ピンク著) です。ダニエル・ピンクは、元米国副大統領の首席スピーチライターを務めた後、自らもフリーランスとなった人。彼が提示するのは、「フリーエージェント」という新しいキャリア・スタイルです。

「1人で複数の職業につく。名刺は職業ごとに数種類を用意。在宅勤務で、インターネットをフル活用し、ゆるやかなネットワークで仕事する。企画ごとにメンバーを組み、柔軟性と創造性を発揮する。仕事と家庭の境界があいまいだから、“家族と仕事の両立”というのがテーマにならない——」

今でいう IC (独立業務請負人：Independent Contractor) のような働き方ですが、当時の私としてはとても新鮮で、自分に合うキャリア・スタイルを見つけ出した感動がありました。

「今、アメリカではこのキャリア・スタイルを持つ人が、労働人口のうち4分の1を占めている」

こうした事実が、今、自分が陥っている現実を打開する糸口になるように思えてきました。

3. いざ、セネガルへ

(1) 大雪の日の決意

2002年の冬、ニューヨークは大雪の続く異常気象に見舞われました。

国際協力機構の専門家としてアフリカのセネ

ガルに単身赴任していた夫は、健康休暇や一時休暇のたびに、日本に帰国することなく、ニューヨークにやってきました。テロ後の厳戒態勢といえども先進国であるため、JICAより特別許可が下り、久々の休暇を家族とともに過ごすことができました。

1人で子どもを育てながら働く側は体力的にきついただけですが、単身赴任をしている側は、精神的につらい思いをしたと思います。子どもの写真をメールで受け取ることはできても、わが子の成長はそれ以上に早いもの。休暇が終わり、またセネガルへ戻る飛行機に乗る瞬間がやはりつらかったようです。

夫がセネガルへと帰任するその日は、朝から雪が降り続き、あっという間に路上の車が雪で埋もれてしまうくらいの大雪の日でした。飛行機がその日飛ぶかの情報も流れず、タクシーも雪のため走っておらず、かろうじて運行している地下鉄に乗って、何としても飛行場に向かわなければなりません。夫は、スーツケースを頭上に抱えながら、雪をかきわけ家を出ました。

「いや、これは難儀なことになったなあ」と不安な面持ちで、暗くなった町を窓からぼんやり眺めていました。

すると、数時間後に自宅玄関のチャイムが鳴ったのです。

ドアを開けると、夫がそこに雪まみれで立っていました。空港には無事に着いたものの、飛行機は欠航。次の便を予約し、最後に走っていたタクシーをつかまえて帰ってきたとのこと。

その晩は、大雪のためはからずして、また家族水入らずの時間を1日だけプレゼントされました。2人とも何もいわなかったけれども、一緒にいられる安心感をかみしめていました。

「セネガルへ行こう。生きるか死ぬかわからないこのご時世だから、家族一緒に安心して暮らそう」

この日、私はそう決めました。

(2) 「マダム」になった日

赴任してから2年が過ぎ、3年目の延長をせずに、帰国することにしました。アフリカでの生活で必要となるのは、夏物の洋服と子ども用

品のみ。新しい生活への期待と不安が入り混じった複雑な思いで、荷物を送るために何度も家と郵便局を往復したのを覚えています。

準備が整い、寒いニューヨークからいったん日本へ帰国。そして、灼熱の国セネガルへと旅立ちました。

英語とスペイン語が混じりあうニューヨークで暮らしたわが子も、もうすぐ2歳。日本語も少し話すようになってきました。

そして無事に、セネガルの首都、ダカールの家に到着。「ボンジュール！マダム」と、元気に運転手とお手伝いさんが迎えてくれました。

さあ、これからはフランス語圏の世界。私の「マダム」生活が始まりました。

(3) 「第2子の壁」を破ろう

家族を持って働こうとする女性にとって壁があるとすれば、それは子どもを持つか持たないかという「第1子の壁」と、持った場合、次にいつ第2子を持つかという「第2子の壁」があるように思います。

私の場合、このセネガルでの「マダム生活」で、この問題をやっつけてしまおう！と画策。

神様はこんな不屈きな願いに対しても、やさしく微笑んでくれ、無事にセネガルでもう一人を出産することができました。

子育てをしながら、次への自己投資を開始。インターネットを使ったマーケティングという全く異なる分野にチャレンジし始めました。

<つづく>

野田 さえ子

(のだ さえこ)

国際基督教大学卒、オランダ社会研究大学院大学
開発学修士。国連プロジェクトサービス機関環境
部担当官を経てセネガル在住。帰国後、2005年
(有)人の森設立。2007年、中小企業診断士登録。

現在、国際協力分野の研修講師として、また、外国人を雇用する企業向けのコンサルティング・研修事業を行う「海外人財ネット」代表として活動中。2児の母。

